
特務部隊はシャーマン！？

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特務部隊はシャーマン！？

【Nコード】

N4471Z

【作者名】

秋月秋代

【あらすじ】

転生者はシャーマンの続きモノ。

光ルートです。

更新は不定期です。
かなり遅くなる予定。

〈第零回〉 プロローグ

三人称

時空管理局地上本部、レジアス・ゲイズ少将は嘆いていた。
ミッドチルダで起きる犯罪の数々。

優秀な局員は本局勤め、本局の連中は次元世界の取締ばかりで、
地上のことを蔑ろにする……。

予算も本局とは天と地の差。

そして何より戦友達ともたちを六年前に失い、己の正義を見失い広域次元
犯罪者に指定されてるジェル・スカリエッティに、違法研究をさ
せている自分に……。

「ワシの正義……あいつと交わした正義。 此処何年耐え続けて来
た……自身の正義から目を逸らして来たが……もう無理だ。 そう
とも、ワシはこんな事の為に上を目指した訳ではない!!」

長年の良心の責め、机に立てられてる自身と戦友の目に耐え切れ
ず、レジアスは一人職務室で叫んだ。

そしてレジアスは、写真立てを見て一人呟く。

「ゼスト、メガーヌ、クイント……今更かもしれん……だが、今更
だからこそワシは、あの頃の自分に戻ろうと思う」

人は、必ずしも正しい道を歩むとは限らない。

甘い言葉に負け、挫折を味わい道を外れる事がある。

しかし、人は道を外れても戻る事が出来る。

レジアス・ゲイズは、六年という月日を経て以前歩いていた道へ

と引き返して行った。

そして遠い未来、レジアスは言う。

「あの時、引き返してて良かった」と……………。

三人称

葉生視点

今、オレの目の前に頭を下げてる小肥りの男が居る。

彼の名前はレジアス・ゲイズ。

なのは達が、働いてる時空管理局のお偉いさんらしい。

なんでもミッドチルダを救う為に、シャーマンの力が欲しいとか
なんとか……………。

「頭を上げる」

「……………」

オレが頭を上げるよう言い、レジアスは頭を上げる。

「ふむ、何故シャーマンを知っているとか、シャーマンの力をどう
利用するのかとか、どうでも良くなった。良いぜ、あんたの力に
なってやる。 精一杯オレをこき使え」

「ありがとう……………ありがとうっ!!」

何故オレが此処まで見知らぬ奴の為に言うかというと、単純にレ

ジアスの目が気に入った。
堕ちた濁った部分はあれど、それに負けない程の輝きを見たから
だ。

以前聞いたリンデイの声、闇の書の中で見せられた人の業、そして
転生前にハオから聞いた「愚かな人間」という言葉。

ああ、ああ、確かに人間は愚かだ。
道を踏み外し、外道と堕ちる奴らばかりだ。

転生前のオレも、そんな奴らの一人だったからよくわかる。
でもよ……人は引き返せる。

やり直せるんだ。

見てるか？ ハオ。人はこんなにも愚かだが、こんなにも愛お
しい。

「だが、どうする？ レジアス。 管理局が欲しいのは魔導師なん
だろ？」

「っ！ それについては考えがある」

涙を拭き、オレの質問に答えるレジアス。

そしてレジアスの考えとは、以下の通りらしい。

シャーマンと言っても、オレにリンカーコアがあるとの事、ソレ
を利用してリンカーコアを持つシャーマンの部隊を創るらしい。

「つまりは覆面魔導師の部隊と？」

「ああ」

「となると数が居るな、わかった。 オレ以外のシャーマンに会わせよう。 だが……」

「わかってる。 ワシが全員口説く！」

「よろしい。 スピリット・オブ・ファイア！」

――ズガアアアンツ！！

「ぬうおー！」

オレの後ろにスピリット・オブ・ファイアが現れると、レジアスは驚いたように声を上げる。

「って、待て」

「ど、どうした？」

何故、魔導師じゃないレジアスが見える？ 魔導師としての資質がないだけで、リンカーコアはあるのか？

「レジアス……確認の為に聞くが、オレの横に何が居る？」

「ん？ 赤い鎧を着た赤髪の女騎士だが」

『ツー！！ 葉生』

どうやらレジアスには、シャーマンとしての資質が高いようだ。スピリット・オブ・ファイアの霊力に触れて、才能が開花したかな？ さっきの驚きはベビーから究極形態になった驚きだろう。

「OK、わかった。それじゃあ、行くところだね」

「ああ……」

葉生視点

〈第一廻〉 スカウト

葉生視点

レジアスを連れて向かった先は、ニューヨークのとある看護学校。此処には、三人のシャーマンが居る。

『彼女達に会うのも久しぶりですね』

そうオレに言ったのは、赤く染まったアルトリアだった。何故赤く染まったのか、これには深くも浅い事情があったわけであり、あえず何処が赤いのかと言つと……金髪から赤髪へ、青いドレスは朱に染まり、手、足、胸にあった銀の鎧は深紅へと変わった。変わらないのは、性格と翡翠の瞳だけだ。

アルトリアが戻って来たのは、もう皆と別れたあと……唯一会ったのがマリオンだけ？

『ええ……』

「葉生……」

「ん、なんだい？ レジアス」

「どうしても入らねばいかんのか？ 出来るなら連れ出して喫茶店か何処かで……」

レジアスが周りを気にしながら、小さく主張する。

まあ女子寮の前で、オレは完全に女子寮に入ってる……そんな状態だからわからなくてもない。

女子しか居ない施設。

むさ苦しいおっさんに、ネイティブ・アメリカンの民族衣装を決め込んだ男が二人。

周りの女子からは不審に思われ、レジアスからしたら恥ずかしい、気まずいといった感じだろう。 だが！！

「考えてもみる？ こっちは頼みに来てるんだ。 あっちから来てもらうのは筋違いだ。 それにこっという所では、堂々としてれば良いのさ」

「そ、そうなのか？」

『いや、私に聞かれても……』

オレの言葉を聞いても信じきれないのか、レジアスはアルトリアに確認するように問い掛けるが、アルトリアは困った表情をしながら答えた。

「ぐぬぬぬ……」

「レジアス……キミの正義は女子寮に堂々と入れない程、ちっせえものなのか？ だとしたら見込み違いだったかな」

「ッ！ そんな事はない！！ ワシは自分の正義の為なら……あいつと夢見た正義の為なら、女子寮に入る事くらい訳無い！！！」

事情を知らない者から聞いたら、どんな正義だ！ とツッコミが来る発言をしながら、ズンツズンと女子寮へ入って行った。

「ぶっくく……」

『意地が悪いですよ。 葉生』

良いじゃないか、これくらい。

それに、この程度で尻込みするんだったら、本気で協力するのを止めるつもりだったし……。

「おい！ 早く来んか！！」

おっと、いけないいけない。

レジアスに急かされるように、オレはレジアスの後を追った。

・・・コンコン……

「はい、どちら様でしょう」

ドアをノックすると、聞こえてきたのは優しくも懐かしい声。

「麻倉葉生だ。 ちょっと」

「ええっ！！ は、葉生！？」

「ちょ、ジャンヌ！ 葉生くんってホント！？」

「私が出て来るわ！」

「「抜け駆け禁止よ！ ミイネ！！」」

ジャンヌが驚いたあとに、部屋の中から潤とミイネの声が聞こえ、段々と慌ただしくなっていた。

「あゝ……元気な事で」

『此処数年で、さらに争奪戦が激化したのでは？』

「とりあえず、後ろから刺されるなよ？」

アルトリアとレジアスの言葉が耳に痛い。

好いてもらってるのは嬉しい、嬉しいけどオレとしては良い人を見つけて欲しいよ。

シャーマンとして優秀な種を残す使命とか捨てて、さらに言えば落ち着きがないオレを見限って……。

「プーアル茶です」

「お構いなく……」

あのドタバタが収まったあと、オレ達は部屋に上がらせてもらい、レジアスをジャンヌ達に紹介した。

まあ、その時にアルトリアの事も一騒動はあったけど、それは今は関係ないので横に置いておく……。

さて此処からが本題、レジアスが掲げる正義。

それを受け止めて、ジャンヌ達が力を貸しても良いと言ってくれるなら良い、もしダメなら諦めるしかない。

「それで何用でしょう」

「急で、貴女方の未来を曲げてしまう話で申し訳ないが、ワシの正義について来て欲しい！！ 時空管理局地上本部へ、ミッドチルダに住む人々が安心して暮らせるよう……」

「……」

沈黙、まあそう簡単に事が運ぶとは思ってなかったし、この展開は当然だね。

「葉生は……葉生はなんと？」

「ミネ、ジャンヌと潤もだけど……これはキミ達の意味で決めてくれ。オレが居るから、皆が居るからじゃなくね。レジアスの意志に、自分の意思で応えてやってくれ」

「ワシからも、願います」

「……ッ！」「」

オレの言葉に、賛同するよつに言つレジアスにジャンヌ達は驚く。当然だろう。

力を貸してくれと言っておきながら、オレがついて行くと言えばついて来るのに、それに頼らないからだ。

レジアスが望むのは、レジアスの正義に共感する者だけ……。

「わかりました。 それでは一週間……時間をください」

「私にも……」

「わかりました。 では、一週間後……玄関の方に居ます」

こうして、最初の勧誘が終わった。

オレとレジアスは、すぐに退室して次の場所へと向かった。

ニューヨークからインド。

スピリット・オブ・ファイアのお陰で、素早く移動する事が出来た。

そして、インドに居るシャーマンは一人。

悟りを開き、人々を救い導くシャーマンを目指す……サティ・サイガン。

闇の書事件の時に、オレを救った西岸サチである。

「サティ」

「葉生！ ……つとそちらは？」

「時空管理局地上本部所属のレジアス・ゲイズだ。

本日は貴女を

勧誘しに来ました」

「勧誘……」

サテイが呟きながら、レジアスの言葉を返す。

そしてジャンヌ達に言った事を丸々偽り無しに言い、サテイもまた考える時間が欲しいと言ってきた。

期限は三日で十分らしい……。

次に来たのは中国だ。

此処に居るのは、オレの友達にしてライバル。

ハオより、五大精霊が二つ……スピリット・オブ・サンダーとスピリット・オブ・レインを授かったシャーマンだ。

ちなみにオレは三つ。

一つはスピリット・オブ・ファイア。

一つはスピリット・オブ・ウインド。

一つはスピリット・オブ・アース。

といつても、ウインドとアースは預かってるだけだな。

まあそれは置いて、そんなハオに認められたシャーマンの名前は、道蓮。 潤の弟だ。

そして、蓮の他にも二人居る。

蓮の許婚である、カンナ・ビスマルクとマチルダ・マティスだ。

彼女達は一族の修行に耐え、さらには独自の修行法を編み出してジャンヌ達と同レベルまで行ったのだ。

そこから超・占事略決を教えたりと、さらに強くなった。

もっともそれは数ヶ月の天下で、すぐにサティとマリオンに抜かれたけどね。

「よく来たな。姉さんから聞いてるから説明は不要だ。結論から言つと、時間をくれ……明日には決めておく」

「どうやら、サティから行ったのは正解だったかな。」

「ニューヨークから中国へ行ったら、潤の連絡は無駄になってただろう。」

「もつとゆっくり決めても構わないんだが……」

「いや、蓮が明日までって言つんだ。明日までに答えは出るよな？」

「当然だ」

「それを聞いて安心した。さあ次で最後だ」

「あ、ああ……」

さて、問題はマリオンか……。

後に後にと考えてたら、結局は最後になったな。

「レジアス……最初に言っておく」

「なんだ？」

「最後の人物だが、どんなに言葉を並べようとも、本人の意思というのは諦めた方がいい」

「どんな人物なんだ？」

「オレ至上主義。オレが居れば自分の考えを無視して、オレについて来る」

なんせ離れる時もギリギリまで迷ってたし、今でも声を掛けられればついて来るからなあ。

「……………どうすればいい」

「こればかりは、しょうがないさ」

如何にレジアスの言葉を聞き、自分で考えろと言っても、理由はオレについて行くになるからな。

『良く言えば純真、悪く言えば陶醉……………小さなスピリット・オブ・ファイアですからね。彼女は……………』

言うな、アルトリア。

イタリア。

とある場所にある、ぬいぐるみ店。

・ ・ ・カランカラン

「いらっしやいませ、葉生様」

扉を開けると目の前に、長い金髪をツインテールにして、黒いワンピースを着たマリオンが出迎えてくれた。

「久しぶりだな。 オレの言いたい事は……」

「わかってます。 でも私は……」

「マリオンの事は、わかってるつもりだ。 レジアス……」

「どうしてもダメか？」

「無理だ」

「わかった……」

「すまないな……」

レジアスに詫びて、オレはマリオンと向き合う。

「……………オレと共に来い。 マリー」

「はい！」

ニッコリと、明るい笑顔を見せるマリオン。

まったく、変わらないな……。

葉生視点

↳ 第一回↳ スカウト（後書き）

キャラクターのプロフィールって要りますか？

〜第二廻〜 答え

葉生視点

マリオンが暮らしてる部屋に、一晩泊まった次の日。
目を開けて隣を確認すると、やっぱりというか案の定というか、
マリオンが裸で寝ていた。

「……………」

「ん……………はおさまぁ」

起き上がるうとして体を起こすと、マリオンが腕に絡みついで動
けない。

仕方なしに、横に置いていた菓子の蓋（当然、缶の）を手に取り

……………

・ ・ ガンガンガンツ！！

マリオンの頭に、容赦無く叩き付けた。

「……………ツ!? 痛い……………」

「目の毒だ、パジャマくらい着ろ」

「はい」

こうやって毎度毎度注意して、ちゃんと返事するがマリオンは一

向に、パジャマを着てくれない。

ちなみにコレは旅に出て、一ヶ月頃から始まった事だ。

久しぶりに再会して直ってると思ったが、どうやらオレの考えが甘かったらしい。

『元々、彼女を小さいスピリット・オブ・ファイアと評したのは、葉生ですよ？』

ああ、オレが甘かったよ！ 甘いよ！ オレは！！ だからそんな目で見んな、アルトリア！！

さて読者諸君、此处でスピリット・オブ・ファイアが嫉妬しないの〜とか思つかもしれんが、スピリット・オブ・ファイアが嫉妬するのは、他の霊とオレが親密になった時だけで、生きた人間同士が親密になるのが嫉妬はしない。 たまにするが……。

と朝はバタついたが、あれ以降何事も無く、中国へと旅立った。

「よう、もう決まったのか？」

「ああ……」

「久しぶりね。 葉生」

「マリーちゃんも久しぶり〜」

「久しぶり、カンナ、マチルダ」

「久しぶり……」

蓮を挟むように居るカンナとマチルダに挨拶をして、三人の答えを待つ。

「俺達が入る事にした。俺達は互いが抑止力だからな、どちらかが傍に居ないとダメだろ」

「ああ、すまないな」

「ありがとう！」

「それで次は何処へ？」

「インドだけど……まだ時間があるから、蓮の所で一泊する予定だけど？」

「構わんぞ」

「いやあ、重ね重ね……ありがたい。」

「にしても、昔と比べて落ち着いたなあ……蓮の奴。これもハオのお陰か？」

《呼んだ？》

呼んでないけど、聞きたい事がある。

《なんだい？》

オレと蓮って、どっちが強いんだ？

《難しい質問だね。 巫力では蓮、靈力ではキミと言った所かな》

フムフム、なるほど……………オレの方が若干弱いつて事か。

《大正解》

わかった、ありがとう。

やっぱり五大神二体は、スピリット・オブ・ファイアを以^もってしても、厳しいらしい。

でも、大陰陽師の称号は伊達じゃない。

いつかは決着を着けないとね。

「親父、今日は葉生と他二名が泊まる事に……………」

- - ガヤガヤ

ん？ なんか騒がしくなった？

蓮が開けた扉を見ると、そこには数百体のキョンシーと巨人が居た。

そして壁には「義息子、歓迎」の文字があった。

- - キイイ……………パタンッ

あ、扉が閉まった。

「すぐにインドに向かうぞ」

「え？ いや、でも……」

「行・く・ぞー！」

「はい………」

というわけで、急遽インドへ向かうことになった。

「あれ？ 葉生に蓮、カンナ、マチルダ、マリー、レジアスさん」

インドに着いて、まず向かったのがサティが住んでる家。

本当は、明日の方が良いんだけどね。

「親父がウザかったから、すぐに来た」

「すまん、サティ」

「いえ、大丈夫ですよ」

サティの許可が出て、オレ達は家の中へ入った。

そのあとレジアスに声を掛けて、シャーマンの修行を課してみた。しばらく見ていてわかったが、やはりレジアスにはシャーマンの才能があるらしく、どんどんその才を開花させて行った。

「……………レジアス」

「ぬ、なんだ？ 蓮」

「お前、シャーマンキングの修行をしないか？」

「蓮？」

今まで黙って見ていた蓮が、レジアスにとんでもない事を言い出してきた。

シャーマンキングの修行。それは、オレと蓮が受けたモノだ。確かにソレを受ければ、レジアスの力は絶対的なモノとなるが、リスクが高すぎる。

「どうする？」

「それを受けれる程の力が、ワシにあるのか？」

「シャーマンの強さは、強靱な精神力だ。貴様の正義が本物なら、可能だろう（俺は葉生のような霊視は出来んからな。だから俺は俺のやり方で、貴様の正義を見極める）」

蓮の心の声が聞こえて来る。

そういった意図があるなら、オレからは何も言えない。

「そう言われては引けんな。受けよう！」

「良いのか？ ああ言ってはなんだが、アレは軽く死ねるぞ」

「構わん！」

「そうか……ならば、逝けい!!」

・・・ドオオオオオンッ!!

蓮はレジアスの魂を剥ぎ取り、すぐさまグレート・スピリッツへと送った。

あとはレジアス次第。

「さて、どうなるか楽しみだ」

「レンはどれくらいの期間、ハオの所に居たんだった？」

「三ヶ月だ。消滅しかかったのは、一回だったかな」

「マゾヒスト」

「黙れ、リア充」

・・・ブチッ

「許婚が居るツンデレに、言われたくないな」

「貴様は五人だがな！」

「」
「」

沈黙が部屋を支配する。

そして……

「ガキイイイインツッ!!」

「やるかああああ!?!」

オレはスピリット・オブ・ファイアの腕だけオーバーソウル化し、蓮はスピリット・オブ・サンダーの腕だけオーバーソウル化してぶつかり合い。オレ達も組み合った。

「ガスッゴスツ!

「グハツ!?!」

「地球で、喧嘩しないように」

頭に強烈な痛みが走った。

翌日。

朝食を取ったあと、サティに呼ばれた。

「私もついて行く事を決めました」

「ありがとう。これからよろしく」

「はい」

これではジャンヌ達だけど、全くといっていいほど不安はな

い。

レジアスは不安で、一杯だったらしいけど……。

「ところで、スピリット・オブ・アースはどちらに？」

『さっき天に昇って行ったのを見たよ』

『私もです』

「担い手の所へ行ったよ」

「では……あの人が？」

「まだわからないけどね。あ、そうだ……あと三日くらい居座るけど良い？」

「ええ、どうぞ」

「ありがとう」

さて、残り三日。

ハオからの報告で、レジアスは頑張ってるらしいけど、大丈夫かねえ。

サティの所に泊まって、三日が経った。

レジアスは、まだ戻らない。

「どっしりよつか？」

「普通に連れていけば良いだろ？」

「いや、レジアスが起きてないと意味がないからなあ」

「……………やはり見極めるのは、見送った方がよかったか」

確かに、空気読めなさすぎの発言だったのは認めるよ。
アレは最低でも、一ヶ月は掛かるし……………。
でも、止めなかったオレも悪いっちゃあ悪いんだけどね。

《やあ、待たせたね》

「ッ！？ ハオ（シャーマンキング）！！」「」

《今からレジアスを帰すよ》

ハオから告げられた言葉の意味がわからずに、オレ達の思考が停止する。

三日だぞ？ 三日！！ いくらなんでも早過ぎるだろ！！

《急ピッチでやった！ 途中から泣いてたけど……………》

「ああ、わかる。 オレ（俺）も覚えがある」「」

レジアス……………強く生きれ！！

「それじゃあ、レジアスも戻ってきた所で行くのでしょうか」

「「…「おー」…」」

「生きてる。こんなにも生きる事が、嬉しく感じるのは初めてだ。母さん、産んでくれてありがとうっ！！」

うん、一人だけなんか違うけど、今はソツとしておこう。
誰だって母親に感謝する時がある。
レジアスにとって、ソレが今日だったんだ。

というわけで、ニューヨーク。

ところで、みんなは知ってるかな？ ニューヨークって、漢字で書くと「紐育」ここう書くんだ。

覚えておくと、なんか良いことでもあるんじゃない？

「時にレジアスの持霊って何？」

「うむ、大地だ」

「大地？」

スピリット・オブ・アースじゃないのか？

「本来の名前は、スピリット・オブ・アースだが……長いから大地と名付けた」

「安直過ぎじゃないか？」

「う、うるさい！」

「だいたいミッドって、欧風の名前だろ？ それだったらアースだけでも……」

『『『『』』』』』』』

「ん、なんだ？ スピリット・オブ・ファイア、スピリット・オブ・ウィンド」

「どうした？ スピリット・オブ・サンダー、スピリット・オブ・レイン」

『『『『』』』』』』』

「名前が欲しい？」

「なんと言うことが……」

「まさか、スピリット・オブ・ファイア達が名前を欲しがるとはなんて……」

「いや、この場合は愛称か……」。
「しかし、どうする？ 完全に予想外だ。
パツなんて思いつかないぞ。」

「スピリット・オブ・サンダーは雷公らいこう、スピリット・オブ・レインは靈龜れいぎだ」

なんか蓮は、すんなりと言ってる。

ヤバい、オレも考えないと!! それにしても雷公は良いとして、何故靈龜? 玄武が水を司るからか? 龜繋がり? でも四神の司る力って、ほとんどバラバラだよなあ。

青龍が司ってる時もあるし、うゝむ…謎だ。

「さつさと決めた方がいいぞ。スピリット・オブ・ファイアが嫉妬する」

『……………』

そうだった…………。

ヤバい、考える! オレ!! 火、炎、太陽…………この三つを司る靈的名前。

カグツチは、没だな。

カグツチは、スピリット・オブ・ファイア自身を指す。

というか、五大神として名を連ねた今では、カグツチなんて下っ端辺りじゃないか?

「…………アマ」

- - ボウツ!

アマテラスですら納得いかない様子…………。

マジで考えねば、死ぬ!!

「はあ…(スピリット・オブ・ファイアだけの名前を決めれば良い

んだ。既存の火霊、火の神の名前を決めた瞬間、終わるぞ」

「……………その考えはなかった」

ならば、真剣に考えてやらないと失礼だな。

スピリット・オブ・ファイアを見て、連想する名前。

火琳かりん、火煉かれん、炎羅えんら、炎湮えんり。

これでは、火に囚われすぎか。

オレの名前を一字加えるとどうなる？

「炎生えんり……………スピリット・オブ・ファイアの炎に、オレの葉生という名前の生をくつつけて炎生と言うのはどうだろう？」

「……………」

スピリット・オブ・ファイアから、嬉しいという感情が流れ込んで来る。

うん、気に入ってくれたみたいで何よりだ。

ただし、心の中くらいではスピリット・オブ・ファイアで良いよな？ 真名は大事なんだし……………。

「あとはスピリット・オブ・ウィンドか……………」

どうせならスピリット・オブ・ウィンドにも、オレの名前を加えたい。

葉……………は、ば、ば、よう。

風……………かぜ、かぎ、ふ、ふう。

そしてスピリット・オブ・ウィンドの性別は女。

風 + 葉 || 風葉

「風葉でどうだ!」

『……………』

うむうむ、御満悦の様子。

というか、読む人から見て五大神の感情ってわかるのか？ 二点
リーダーだろ？

《その為に、キミが言ってるんだから良いだろ?》

まあな…………。

さて考え事をしていたら、ジャンヌ達が居るではないか。
という事は……………

「ああ覆面魔導師部隊が完成したんだ!!」

レジアスの喜びに満ちた声が、周囲に響く。
周りの視線が痛い、今は祝福しておこう。

「さあて、此処から本腰を入れるぞ！ 会議だ、レジアス!!」

「わかってる!!」

葉生視点

プロフィール

葉生と葉生の持霊

名前：麻倉 葉生

性別／年齢：男／17歳

学歴：小学校 卒業

出身地：日本・海鳴市

巫力数（前回値）：125億402万（125億）

備考：各世界の靈山に登り、シャーマンキングである八才の修行で17歳という若さで、大陰陽師へと成長を遂げた。

持霊1

名前：アルトリア・ペンドラゴン

性別／ランク：女／神

霊力数（前回値）：30億（20万）

媒介：酸素・エクスカリバー

戦闘スタイル：剣術・燃焼

備考：葉生の最初の持霊。

以前と違って姿が一変しており、新たな能力も手にしてる。

持霊2

名前：炎生^{えんり}

真名：スピリット・オブ・ファイア【究極形態】

性別/ランク：女/五大神

霊力数(前回値)：60億(-)

媒介：酸素・燃焼物・熱源

戦闘スタイル：燃焼

備考：葉生の為に誕生した二体目の五大精霊。

しかし凄まじい成長を見せて、五大精霊の枠に収まりきれずにシャーマンキングが、新たに五大神という枠を作る程。

ちなみに五大神は、その強力故か互いが抑止の存在となっている。

持霊3

名前：風葉ふうよう

真名：スピリット・オブ・ウィンド

性別／ランク：女／五大神

霊力数：60億

媒介：空気・風

戦闘スタイル：気流、気体、気圧の制御

備考：五大神同士の抑止的存在。

葉生と葉生の持霊

蓮と蓮の持霊

名前：道 蓮

性別／年齢：男／17歳

学歴：中学校 中退（表向きは、転校）

出身地：中国・貴州

巫力数（前回値）：200億（102万4千）

備考：葉生のライバル的存在。
AS時、葉生との実力差が大幅に広がって以来、修行に明け暮れる
毎日を送っていた所、シャーマンキング直々に修行をつけてもらう
事にこぎつけた。

持霊1

名前：馬孫

性別/ランク：男/精霊

霊力数：10万6千

媒介：馬孫刀・宝雷剣

戦闘スタイル：刀剣術・雷を操る

備考：蓮の持霊。

道家に仕えてる武将の霊。

持霊2

名前：雷公ライコン

真名：スピリット・オブ・サンダー

性別／ランク：男／五大神

霊力数：60億

媒介：雲・宝雷剣

戦闘スタイル：放電・磁力

備考：五大神同士の抑止的存在で、シャーマンキングとの修行を受けてた蓮の魂に惹かれて、自ら蓮の持霊となった。
シャーマンキングもそれを許可している。

持霊3

名前：霊亀れいき

真名：スピリット・オブ・レイン

性別／ランク：女／五大神

霊力数：60億

媒介：水

戦闘スタイル：浸透・溶解

備考：五大神同士の抑止的存在。

スピリット・オブ・サンダーと同じく、蓮の魂に惹かれて持霊になった。

これもシャーマンキングの許可が下りてる。

他にも、李書文や呂布などが居たが、蓮の修行に耐え切れずに、現在はグレート・スピリッツにて療養中。

蓮と蓮の持霊

ジャンヌとジャンヌの持霊

名前：アイアンメイデン・ジャンヌ

性別／年齢：女／17歳

学歴：医療専門学校 自主退学（表向きは、転校）

出身地：フランス・ロレーヌ地方

巫力数：1億760万

備考：葉生の許婚にして、神クラスのシャーマン。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：シヤマシユ

性別／ランク：男／神

霊力数：52万

媒介：拷問器具、アイアンメイデンの面

戦闘スタイル：審判（ほぼ死刑というか私刑が多い）

備考：神クラスの霊にして、絶対正義の権化とも言うべき存在。

その正義には一切の妥協を許さず、行ってきた審判の殆どが死刑（
というか私刑）。

ジャンヌとジャンヌの持霊

潤と潤の持霊

名前：道 潤

性別／年齢：女／21歳

学歴：医療専門学校 自主退学

出身地：中国・貴州

巫力数：1億

備考：葉生の許婚で、キョンシーを操るシャーマン。
その実力は並のシャーマンでは、上位に食い込むというか巫力、戦闘技術から神クラスのシャーマンとなっている。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：孫明

性別/ランク：女/人間霊

霊力数：1000

媒介：自身の肉体

戦闘スタイル：肉弾戦

備考：潤の持霊にして、キョンシー。
彼女が使う戦闘技術は、中国の英霊達から得たモノで、よく好んで使うのは馬孫から教わった中華斬舞の亜種（格闘術）、中華乱舞。

潤と潤の持霊

ミネとミネの持霊

名前：ミネ・モンゴメリ

性別／年齢：女／21歳

学歴：医療専門学校 退学

出身地：カナダ・モントリオール

巫力数：1億

備考：葉生の許婚。

当初はそれなりの実力者だったが、麻倉家で修行し、許婚同士と競い合う事で神クラスのシャーマンとして覚醒した。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：ミカエル

性別／ランク：男／聖霊

霊力数：48万

媒介：光

戦闘スタイル：剣術・レーザー

備考：機械天使ではなく、本物の天使。
天国のコミュニケーションで、他のコミュニケーションを管理してる時にミネネと出会って持霊になった。

ミネネとミネネの持霊

サティとサティの持霊

名前：サティ・サイガン

性別／年齢：女／20歳

学歴：小学校卒業

出身地：日本・東京

巫力数：50億

備考：葉生の許婚。

許婚の中でも一位、二位を争う程の実力者だが、温厚な性格から戦う事を嫌う。

葉生との関係は良好。

持霊

名前：ダイニチ

性別／ランク：男／神

霊力数：70万

媒介：腕釧わんせん

戦闘スタイル：大仏パンチ

備考：サティとの修行で、宇宙からの力を受けてセンジュがダイニチへと昇華した。
その強大な力故か真の姿では、世界が壊れるため、何百万分の一にまで抑えてオーバーソウルになる。

サティとサティの持霊

マリオンとマリオンの持霊

名前：マリオン・ファウナ

性別／年齢：女／16歳

学歴：小学校 卒業

出身地：イタリア・ナポリ

巫力数：100億

備考：葉生の許婚。

サテイとタメを張る程の実力を持つシャーマン。

葉生の為ならなんでもし、何に置いても葉生、葉生、葉生。

これほどマリオンが葉生を執着する理由は、実の所マリオン自身よくわかっていない。

葉生との関係は良好だが、周りから見たマリオンは異常の一言。

持霊1

名前：キッド

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：750

媒介：西部のガンマン人形

戦闘スタイル：銃撃

備考：マリオンの持霊。

持霊2

名前： .

性別／ランク： /

霊力数：0

媒介：無し

戦闘スタイル：無し

備考：霊力0という異常な霊（霊とすら呼べるかわからない）。マリオンすら知らない何か。葉生もシャーマンキングすら気付かない何か。詳細は不明で、おそらく表には一生出てこない。しかし、マリオンの葉生の執着の原因はコレ。

マリオンとマリオンの持霊

カンナとカンナの持霊

名前：カンナ・ビスマルク

性別／年齢：女／20歳

学歴：高校 卒業

出身地：ドイツ・ザクセン

巫力数：1億3千

備考：蓮の許婚。

当初、葉生の許婚達とは仲が悪かったが、今では仲が良い。
蓮との関係は良好。

持霊

名前：アシユクロフト

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：1700

媒介：煙

戦闘スタイル：槍術

備考：カンナを守護する老騎士。
その実力は鎧を纏った状態でも、孫明を凌駕する。

カンナとカンナの持霊

マチルダとマチルダの持霊

名前：マチルダ・マティス

性別／年齢：女／17歳

学歴：中学校 中退（表向きは、転校）

出身地：イギリス・スコットランド

巫力数：1億

備考：蓮の許婚。

彼女もカンナ同様、葉生の許婚達と仲が悪かったが、今では仲が良
い。
蓮との関係は良好。

持霊

名前：ジャック

性別/ランク：男/人間霊

霊力数：1500

媒介：カボチャ人形

戦闘スタイル：ナイフ

備考：マチルダの持霊。

イギリスで恐れられてた連続殺人犯。

マチルダとマチルダの持霊

レジアスとレジアスの持霊

名前：レジアス・ゲイズ

性別／年齢：男／52歳

出身地：ミッドチルダ・――

巫力数：70億

備考：今更、正義を取り戻した男。

長年の良心の責めに耐え切れず、しかし自壊せずに引き返すという強い精神を見せた。

その精神の強さ、正義は、葉生、蓮、ジャンヌ、サティと言った最強のシャーマン達に認められ、さらには大地を司りし五大神、スピリット・オブ・アースにも認められる程。

持霊

名前：大地

真名：スピリット・オブ・アース

性別／ランク：男／五大神

霊力数：60億

媒介：土・石

戦闘スタイル：重力操作・地震、地割れ等の土と岩関連の災害

備考：五大神同士の抑止的存在。

レジアスの強さに惹かれ、自らレジアスの持霊になった。

レジアスとレジアスの持霊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4471z/>

特務部隊はシャーマン！？

2011年12月18日10時51分発行